

シュタルク効果の下での逆散乱について

石田 敦英 (東京理大工)[†]

2019年4月27日 神楽坂解析セミナー

1. 導入

通常の2体自由シュレディンガー作用素に空間一様な定電場 $0 \neq E \in \mathbb{R}^n$ が印加された $L^2(\mathbb{R}^n)$ 上の自己共役作用素

$$-\hbar^2 \Delta / (2m) - qE \cdot x \quad (1.1)$$

は自由シュタルクハミルトニアンと呼ばれる。ここで、 $x \in \mathbb{R}^n$ は考えている粒子の位置、 $\Delta = \sum_{j=1}^n \partial_{x_j}^2$ はラプラシアン、 $\hbar = h/(2\pi)$ 、 $m > 0$ 、 $0 \neq q \in \mathbb{R}$ はそれぞれプランク定数、質量、電荷といった物理定数を表す。以下では記法を簡単にするため、適当な回転とスケール変換により、 $E = e_1 = (1, 0, \dots, 0)$ 、 $\hbar = m = q = 1$ として次のハミルトニアンを採用しよう。

$$H_0^S = |p|^2 / 2 - x_1. \quad (1.2)$$

なお、 p は粒子の運動量 $-i\nabla = -\sqrt{-1}(\partial_{x_1}, \dots, \partial_{x_n})$ である。

空間次元 $n \geq 2$ としておく。本講演では、粒子間に働く相互作用ポテンシャル V を摂動としたとき、波動作用素を用いて定義される散乱作用素の情報から V の一意性を導く逆問題についての結果 ([I]) を報告する。特に先行研究 [W], [N], [AM], [AFI] の結果とを比し、一意に定まる V のクラスが広がることについて詳しく述べたい。

ポテンシャル V の仮定は散乱理論において非常に重要な意味を持つ。詳細は以下で述べるが、大まかに言うと、実数値の掛け算作用素であり、遠方ではその値が消えているものを想定する。このようなポテンシャル関数 V を用いて、全ハミルトニアンを

$$H^S = H_0^S + V \quad (1.3)$$

で定義すれば、以下の仮定 1.1 の下、 H^S も自己共役作用素として実現される。

さて、 V の仮定に入ろう。 $V = V^{vs} + V^s + V^1 \in \mathcal{V}^{vs} + \mathcal{V}^s + \mathcal{V}_G^1 \cup \mathcal{V}_D^1$ と表されるとし、それぞれのクラスには以下の条件を課す。ただし、 $\langle x \rangle = \sqrt{1 + |x|^2}$ であり、 $F(\dots)$ は集合 $\{\dots\}$ の定義関数、また $\|\cdot\|$ は $L^2(\mathbb{R}^n)$ における作用素ノルムを表す。

仮定 1.1. $V^{vs} \in \mathcal{V}^{vs}$ は、 $V^{vs} = V_1^{vs} + V_2^{vs}$ とさらに2つに分かれており、特異性を許容する V_1^{vs} は、 $|p|^2/2$ 有界でその相対限界は1より小さく、また $x_1 V_1^{vs}$ も $|p|^2/2$ 有界とする。 V_2^{vs} は \mathbb{R}^n 上の有界な関数であり、 V^{vs} としては次の空間遠方の減衰を仮定する。

$$\int_0^\infty \|V^{vs}(x) \langle p \rangle^{-2} F(|x| \geq R)\| dR < \infty. \quad (1.4)$$

$V^s \in \mathcal{V}^s$ は C^1 級関数であり、空間の減衰として

$$|V^s(x)| \leq C \langle x \rangle^{-\gamma}, \quad |\partial_x^\beta V^s(x)| \leq C_\beta \langle x \rangle^{-1-\alpha}, \quad |\beta| = 1 \quad (1.5)$$

本研究は科研費 (課題番号 16K17633) の助成を受けたものである。

キーワード : scattering theory, Stark effect, inverse problem

[†] 〒125-8585 東京都葛飾区新宿 6-3-1 東京理科大学工学部教養

e-mail: aishida@rs.tus.ac.jp

を仮定する. なお, γ と α は, $1/2 < \gamma \leq 1$ かつ $0 < \alpha \leq \gamma$ をみたす数である. $V^1 \in \mathcal{V}_G^1$ は C^2 級関数で, 以下の減衰を持つ.

$$|\partial_x^\beta V^1(x)| \leq C_\beta \langle x \rangle^{-\gamma_G - \kappa|\beta|}, \quad |\beta| \leq 2. \quad (1.6)$$

ただし, γ_G と κ は, $0 < \gamma_G \leq 1/2$ かつ $1 - \gamma_G < \kappa \leq 1$ をみたす数. 最後に, $V^1 \in \mathcal{V}_D^1$ も C^2 級関数であるが, 空間の減衰としては

$$|\partial_x^\beta V^1(x)| \leq C_\beta \langle x \rangle^{-\gamma_D - |\beta|/2}, \quad |\beta| \leq 2 \quad (1.7)$$

を仮定する. また, γ_D は $3/8 < \gamma_D \leq 1/2$ をみたす数である.

2. 主結果

まず $V^1 \equiv 0$ の場合の結果から始める. この場合 V は短距離型と呼ばれ, 仮定 1.1 の下, 波動作用素

$$W^\pm = \text{s-lim}_{t \rightarrow \pm\infty} e^{itH^S} e^{-itH_0^S} \quad (2.1)$$

の存在は知られており, これらを用いて散乱作用素 $S(V) = (W^+)^* W^-$ が定義される.

定理 2.1. $V_1, V_2 \in \mathcal{V}^{vs} + \mathcal{V}^s$ に対して, $S(V_1) = S(V_2)$ ならば $V_1 = V_2$ である.

次に $V^1 \neq 0$ の場合, すなわち長距離型の場合を考える. V^1 の空間減衰の緩さゆえ, 通常の波動作用素 W^\pm の存在は保証されないが, $V^1 \in \mathcal{V}_G^1$ に対しては, 次のグラフ型修正波動作用素 (例えば [G])

$$W_G^\pm = \text{s-lim}_{t \rightarrow \pm\infty} e^{itH^S} e^{-itH_0^S} e^{-i \int_0^t V^1(e_1 \tau^2/2) d\tau}, \quad (2.2)$$

ならびに, 次のドラード型修正波動作用素 (例えば [JY]) の存在が知られている.

$$W_D^\pm = \text{s-lim}_{t \rightarrow \pm\infty} e^{itH^S} e^{-itH_0^S} e^{-i \int_0^t V^1(p\tau + e_1 \tau^2/2) d\tau}. \quad (2.3)$$

また, $V^1 \in \mathcal{V}_D^1$ の場合においてもドラード型 W_D^\pm は存在する. よって $V^1 \in \mathcal{V}_G^1 \cup \mathcal{V}_D^1$ に対して, ドラード型修正散乱作用素 $S_D(V^1; V^{vs} + V^s) = (W_D^+)^* W_D^-$ が定義される.

定理 2.2. $V^1 \in \mathcal{V}_G^1 \cup \mathcal{V}_D^1$ とする. $V_1, V_2 \in \mathcal{V}^{vs} + \mathcal{V}^s$ に対して, $S_D(V^1; V_1) = S_D(V^1; V_2)$ ならば $V_1 = V_2$ である.

参考文献

- [AFI] T. Adachi, Y. Fujiwara, A. Ishida, On multidimensional inverse scattering in time-dependent electric fields, *Inverse Problems* **29** (2013), no. 8, 085012, 24 pp.
- [AM] T. Adachi, K. Maehara, On multidimensional inverse scattering for Stark Hamiltonians, *J. Math. Phys.* **48** (2007), no. 4, 042101, 12 pp.
- [G] G. M. Graf, A remark on long-range Stark scattering, *Helv. Phys. Acta* **64**, (1991), no. 7, 1167–1174.
- [I] A. Ishida, Inverse scattering in Stark effect, *arXiv*: 1811.09113.
- [JY] A. Jensen, K. Yajima, On the long range scattering for Stark Hamiltonians, *J. Reine Angrew. Math.* **420** (1991), 179–193.
- [N] F. Nicoleau, Inverse scattering for Stark Hamiltonians with short-range potentials, *Asymptotic Anal.* **35** (2003), no. 3–4, 349–359.
- [W] R. Weder, Multidimensional inverse scattering in an electric field, *J. Funct. Anal.* **139** (1996), no. 2, 441–465.